

2022年3月27日（日）主日朝礼拝説教

『ペトロの涙』井上隆晶牧師
イザヤ書 50 章 4～9 節、ルカ 22 章 54～71 節

①【ペトロの三回の否認】

イエス様はゲッセマネの園で捕らえられ、そのまま大祭司の家に連れていかれました。弟子たちはみな逃げてしまいましたが、ペトロだけは遠く離れてその群れについて行き、大祭司の屋敷に入りました。この先、どうなるのかを見届けたかったのだと思います。人々が屋敷の中庭で火を焚いて座っていたので、その中に紛れ込み彼も腰を下ろして火にあたっていました。するとそこに大祭司の家の女中がやってきました。暗闇の中でたき火に照らされた顔がぼーっと浮かびます。その人々の顔を見ていたら、その中にペトロの顔が見えたのです。そこで「この人も一緒にいました」（56 節）といいました。ペトロは焦ったと思います。そして彼女の言葉を打ち消して「わたしはあの人を知らない」（57 節）と言います。しばらくしてほかの人がペトロを見て「お前もあの連中の仲間だ」（58 節）と言うと、ペトロは「いや、そうではない」と打ち消します。彼は自分を防御するためにどんどん嘘を重ねていきます。それから 1 時間ほどがたちました。この 1 時間の間、ペトロはどんな気持ちでたき火にあたっていたのでしょうか。彼の周りの人々も 1 時間の間、口に出しはしませんが、心の中でじいーとペトロを怪しいと思っているのです。この沈黙の時間が何とも言えません。ペトロは人々に見つめられている間、その視線が気になってしかたがなかったと思います。今度は別の人が「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」（59 節）という、ペトロは「あなたの言うことは分からない」と言いました。ガリラヤの人たちは言葉に「なまり」があったので分かってしまったようです。ユダヤでは有罪となる為には三人の証言が必要でしたが、ここで三人の証言が揃いました。大祭司の家の中では、イエス様に対する証言はみんな食い違ったのに、下の中庭ではぴったりと合ったのです。そしてペトロが三回目に嘘をついた時、鶏が鳴きました。鶏は夜が終わり、朝の始まりを告げます。太陽が昇り、闇を追い払い、すべてのものが明らかに見えるようになります。ペトロの無知・うぬぼれという闇が晴れ、本当のペトロの姿が露わになりました。自分は弱いということ、自分には信仰はないということ、自分はガリラヤ人だということがばれたのです。

その時、「主は振り向いてペトロを見つめられた。」（61 節）と聖書は書いています。大祭司の家にいるイエス様から中庭にいるペトロは見えていたのでしょうか。イエス様は捕まる前、弟子たちに「今夜、あなたがたは皆、わたしにつまずく」（マタイ 26：31）と予告されました。するとペトロは「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません」と断言します。そこでイエス様はペトロに「はっきり言うておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないというだろう。」（同 26：34）と話されました。イエス様と視線が合

った時、ペトロはこの言葉を思い出しました。そして彼はたき火から立ち上がり大祭司の家から明け方の少しまだ薄暗い外に出てゆき、激しく泣きました。

●長崎の大浦天主堂の横にコルベ記念館があります。そこの館長をしている小崎登明修道士がこんなことを書いています。「私は原爆の丘で、救いを求めてきた小学六年生の男の子を助けなかった。工場の女子学生をタンカに乗せて、助けていたのだが、敵機が来襲すると、タンカをほっぽり出して一目散に逃げた。林の中で、工場のかたきである仲間と出会い、負傷しているのを良いことに「ザマア見ろ」とあなどり、許さなかった。私は原爆で、家も、母も、着物も、本もすべて失った。全部失い、裸になった時に、私に『助けない』『逃げる』『許さない』、この心が残っていたのを悟ったのです。それは人間が根本的に持っている弱さだと感じました。」

自分は弱い、信仰はない、罪人である、これが飾りが剥がされた本当の私たちの姿なのだと思います。

②【光に照らされても見えない人たち】

夜が明けると、律法学者、長老、大祭司たちが集まり、イエス様を最高法院に連れ出して裁判をしました。裁判というのは隠されていた事実が判明し、罪が公にされることです。ここでは祭司長たちがイエス様を裁いていますが、実は逆に、彼らが裁かれているのです。彼らは神の前にいるからです。彼らは「お前がメシアなら、そうだと言うがよい」と尋問します。それはイエス様の言葉尻をとらえて有罪の証拠とするためです。しかしイエス様は「私が言ってもあなたたちは決して信じないだろう。わたしが尋ねても、決して答えないだろう」(22:67)と言われます。どうして彼らはイエス様を信じ、受け入れなかったのでしょうか。それは彼らにはメシアのイメージ(偶像)があり、それとイエス様があまりにも違っていただけです。彼らはイエス様という太陽に照らされながらも、自分の飾りを脱ごうとはしませんでした。知識や肩書で自分を守り、その中に隠れ、本当は神の戒めを守ることが出来ない者であることを認めようとしませんでした。彼らは嘘つきです。自分を正しいとし、自分のイメージが絶対だと思って譲りません。人間は自分の思い通りになってくれる神を求めています。人間の罪の根は「偶像崇拜」なのです。先週も言いましたが、偶像を追いかけることは、すべての神の恵みは無駄にすることになりますし、何も見えない者になるのです。目の前に神が立っておられるのに見えないのですから。「目があっても見えない、耳があっても聞こえず、鼻と口には息が通わない。偶像を造り、それに依り頼む者は皆、偶像と同じようになる。」(詩編 135:16~18)とある通りです。神が現れる時、それは恵みの時ですが、同時に裁きの時ともなります。太陽のことを考えて下さい。光を好む虫には太陽の光は救いになりますが、闇を好む虫にとってはそれは苦痛となるのです。キリストがこの世にもう一度やって来られる時は、まるで太陽が昇る時のようなものです。悔い改めた人には救いの時になり、罪を隠す人には裁きの時となります。私たちのこの世での信仰生活とは、この太陽が昇る時を待つ

ようなものなのです。いつかは神様の前に立たなければならない日がやって来ます。その太陽の光に耐えられるように準備をして生きたいと思います。

③【神に見つめられることの大切さ】

女中はペトロを「じっと見つめ」(56節) たとありました。ここには「目にする」「じっと見つめる」「見る」「見つめる」という言葉が出てきます。人間というのはまじまじと見つめられるのは嫌なものです。裁かれるのではないか、本性が暴かれるのではないかという恐怖感を覚えるからです。だから目を反らします。しかし子供がじっと見つめるのは嫌ではありません。子供は偏見が無く、誰をも裁かないからです。その目は人を信じ、疑うことを知りませんし、すべてを受け入れる目です。誰もがこの澄んだ目を持っていました。しかし大人になるに従ってその目は疑う目、恐れる目、寂しい目、淀んだ目になっていきました。人の裁きの目では人はますます嘘を重ね、言い訳をし、自分を飾り、認めようとしませんが、キリストの目だけは違います。ペトロはイエス様に見つめられて変わりました。「主は振り向いてペトロを見つめられた。」(61節) この神の慈しみ深いまなざし、キリストの愛のまなざしと神の言葉によって彼は回心します。だから神の前に立ち、神の言葉を読み続けるのです。そうするとどうなるのか。私が小さくなり、私を愛されるキリストの愛が大きく見えてくるのです。先ほどの、小崎修道士はいいいます。「その弱い人間を救うにはどうするか。一つ目標をもつことだ。キリスト、マリア、聖人たちを目標として仰ぎ見る。眺め、手を差し出す。それが祈りであろう。神の霊と恵みによって、人は変わる。これが日々の修行であろう。」

面白い記事がインターネットにのっていました。

●ゼレンスキー大統領から学ぶ、大事な決断を間違えない方法。

自分の大切な人を頭に思い浮かべながら決断をすれば、その決断は良いものになる可能性が高いというものです。大切な人に恥じないような行動をし、大切な人が認めてくれるような反応をしようとし、言葉も行動も、自分がなりたいと思う人物になる可能性ははるかに高くなります。あなたが愛する人の写真を正面の壁に飾ったら考えてみてください。その人は、あなたがこれから言うこと、あなたがこれからやること、あなたの行動によって明らかになるあなたを、誇りに思うだろうかと自問自答してみてください。その写真を見て、手に入れたいものではなく、なりたい自分がどんな人物だったかを思い出してください。

私は自分の心が清くなりたくてキリスト教に導かれました。もともと行っていた教会は「潔め派 (ホーリネスの群れ)」と呼ばれる教会です。洗礼を受けて 40 年になります。「清くしてください」とずっと祈っていますが、ちっとも清くなりません。しかし他に方法を知りません。一つだけ分かることがあります。イエス様は私の心がきれいなので信仰を与えたのではないということです。主は私が立派

で良い人だったから弟子にしたのではない、ということです。私には誇りとするものはありません。「あなたは口では交わりを大切にしましょうと立派な事を言いながら、何もしてくれないではないか」とある人に言われたことがあります。その通りです。でもこんな人間でもイエス様は私から信仰を取り上げられないし、聖霊はとどまって下さいます。不思議です。私はその方の思いを大切にしたいと思います。キリストは私を信じて下さっているのです。その期待に少しでも応えたいのです。キリストは、私がどんな人間であるかということよりも、どんな人間になりたいかを見ていて下さいます。なれなかったとしても、その努力を褒めて下さると思います。キリストのまなざしを思い出し、何度倒れても立ち上がり、歩んでいきたいと思います。